

博士学位論文審査要旨

氏名	楊洲
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博甲第283号
学位授与の日付	2022年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文の題目	自然会話における中国語フィラーの使用実態 —談話管理理論に基づく機能分析—
論文審査委員	主査 神奈川大学 教授 彭国躍 副査 神奈川大学 准教授 加藤宏紀 副査 神奈川大学 准教授 夏海燕 副査 長野大学 教授 宮本大輔 副査 九州大学 准教授 劉羸

【論文内容の要旨】

自然会話は、文章表現とは異なり、発話の途中で、言い間違い、言い直し、繰り返すなど多様な非流暢現象が頻出する。その現象の中で、最も典型的なのは発話中に発せられる「無意味語」つまり辞書に記載されるような意味論的な意味を伝達しないことばである。日本語では「うん」「あー」「ええと」など、中国語では「那个」「嗯」「然后」「就是」などがそれにあたる。本来なら代名詞、感嘆詞、接続詞、副詞として機能するこれらの中国語は、自然会話において、時間稼ぎ、沈黙回避、対人的配慮、話者の心理活動や脳内の情報処理などのような、意味論的にも文法論的にも解釈できない様々な機能を持っている。このような現象は、言語学の談話分析の分野で「フィラー」(filler)と名づけられる。日本において1990年代以降この現象が注目され、多くの研究成果が蓄積されてきた。中国においても2000年代から「談話標識」(discourse markers)研究の中で中国語のフィラー現象に関心が寄せられ、特定の語彙の談話機能に関する論考が増えてきている。本研究は、このような談話研究の背景を踏まえ、中国語の自然会話における豊かなフィラー現象を独自に収録した音声データに基づいて分析し、フィラー発生のメカニズムと談話管理、情報操作にかかわる機能を解明し、その音韻、形態、類型などについて総合的、体系的に研究することを目的とする。

本論文は全部で10章によって構成される。第1章では研究の動機、目的と意義などについて述べた。第2章ではフィラー現象に関する日本と中国の先行研究を概観し、それぞれの到達点、問題点および本研究との関係について説明した。第3章ではインフォーマントの選定方法、音声データの収集と文字化のプロセスおよび分析の理論的根拠などについて解説した。第4章では中国語母語話者12組による3時間28分の会話データの中からすべてのフィラー現象を抽出し、その使用回数、出現の延べ数、出現の位置などの実態を明らかにした上で、それぞれの表現形態の分類を行い、語彙的体系化を図った。第5～9章は「那个」「嗯」「怎么说呢」「然后」「就是」という出現頻度の高

い特定のフィラーに焦点を絞り、詳細な談話機能のケーススタディを行った。第 10 章では本研究で得られた主要な成果を要約し、中国語教育への応用に関する提言を行った上で、今後残された課題について説明した。

本研究の主な成果について次のように整理することができる。(1) 独自の談話データに基づく中国語フィラーの体系像を記述することができた。自然会話データに出現したすべてのフィラーを大きく 4 種類(代名詞型、感嘆詞型、接続詞型、副詞型)に類別し、「代名詞型」の中ではさらに「指示代名詞型」と「疑問代名詞型」を区別した。(2) フィラーが持っている多様な機能が発見できた。実際の会話に現れたフィラーの統計データに基づいて、中国語フィラーの機能を大きく「情報探し機能」「談話管理機能」「心的機能」の 3 種類に分類し、そして、「情報探し機能」の中で「内容探し」「表現探し」「話題探し」の 3 種類、「談話管理機能」の中で「ターン取得」「ターン維持」「ターン譲渡」の 3 種類、「心的機能」の中で「ぼかし」「やわらげ」の 2 種類のように、それぞれの下位分類を行った。それから、使用率の高い個々のフィラーのメイン機能を分析した結果、各種類のフィラーは自由変異として制限なく使われるものではなく、異なる形態のフィラーがそれぞれ「記憶探し、内容調整、話題展開、言い換え、内容解釈、話題導入、表現検索、明言回避など」異なる機能を持つことを発見することができた。さらに、音韻面での声調と談話機能の対応関係、例えば「嗯」の第 1 声の平の声調は思考時間の確保機能、第 2 声の上昇の声調は脳内の情報整理の機能、そして第 4 声の下降の声調は情報検索終了機能とターンの譲渡機能などとそれぞれ対応関係が成立する事実を発見した。(3) 中国語のフィラー使用と発話参加者の社会的属性(個人差、男女差、親疎差)との関係を明らかにした。本研究の統計データにより、フィラー使用の個人差が激しいこと、親疎差において初対面の会話でのフィラー使用が親しい人間関係の会話でのフィラー使用より多いこと、そして、男女差が認められないことというような事実が明らかになった。

【論文審査の結果の要旨】

楊洲氏の博士(文学)学位申請論文に対して、5名の審査委員が公正かつ厳格な審査を行った結果、次のような結論に達した。(1) 自然会話の音声データを分析することにより、書記言語のコーパスによる研究では得られない、学術的価値の高い成果を得られた。(2) 本研究によるフィラーの諸機能の発見は、オリジナリティが高く、その中にはこれまでの研究では解明されなかった要素が多く含まれている。(3) 本研究は言語学における中国語の談話分析の領域に重要な知見を提供することができた。

以上の審査結果に基づき、本論文は、研究分野の先端性、研究方法の妥当性、研究結論の独創性などの点において、高い学術レベルに達したことを認め、最終試験において、楊洲氏が高度な研究能力を備え、博士学位を受けるに値することを審査員全員が認定した。